

日中古絵画に見る美女イメージの考察 ——日中美術・文化史の視点から考察——

王 海 静

今の時代、女性に「美人」・「綺麗」・「可愛い」などと声をかければ、嬉しい人は多いはずである。勢の人は美人と呼ばれるために、肌のスキンケアから始め、数多くの化粧品に夢中し、さらに執着する人は金を健康に賭けて美容手術を受ける。

ところでいったい美人とは何か。文化や時代によって美人の基準は異なる。同じ地域でも時代により美人の定義は変化するが、また同時代であっても地域・文化圏の違いによって基準は異なり、時には異民族の間で共通する美人観も存在した。一般的に価値観の多様化が進んだ社会であれば美人に対する基準も個人差がある。

西洋人はともかく同じ東アジアに位置する日本と中国は、古代から現代まで緊密な交流が行われている。現代の日中女性の美意識、特に化粧文化に関する事柄は共通点が多いためと思われる。一方、古代の日中女性の美人文化はどうなっていたのだろうか。古代では異文化の間で日中の美人文化において共通点があるかどうか、もしあるとしたら、どんな部分で見られるのだろうか。

以上のような視点に立って、筆者は拙論の中で考察を進めて行った。

歴史から見ると、日本と中国の間にはかなり類似性を持つ文化が見られる。例えば中国人も日本人もモンゴロイドで、同じ黄色人種に属している。しかも近代以前は両国とも儒教文化圏にふくまれていた。日中間には文化的なつながりが緊密であると言える。古くから中国は日本に影響を及ぼしてきたが、時代によっては、共通する美人観とは相違する美人観もあった。

拙論では「日中古絵画美女イメージの考察」というテーマに従って、主に美術と文化史の視点から、日中国古代美女のイメージを考察していった。

まず序章では、拙論を執筆するにあたっての動機は、張競氏の「時代を遡って見ると、異なる文化の間で共通する美人観など全くなかった。古代にそれぞれの文化に異なる美人像があり、その間にならば共通もない」とする見解に対する異見を示すことから始めた。つまり筆者は「異文化間や時代によっては共通する美人観と相違する美人観もあった」という見解に立ち考察を行ってきた。

次に第一章では日中美女文化観に関する概要を、第二章では日中美女理想的な体型の角度から古代日中理想的な美女の体型、また異文化の間での美女文化を比較しながら、異同点を見出した。そして第三章では日中美女化粧文化の視点から古代日中美女文化の異同点を考察したが、本章は拙論の中で最も力を入れて考察した箇所である。化粧文化のいろいろな角度から検討した結果、古代日中美女文化は「日本と中国の間に共通する美人観と相違する美人観もあった」ということが判明した。

そもそも美人イメージがどのように表現されたかは、単に美術や文学だけの問題ではない。哲学、歴史学、美学、心理学、人類学、社会学などの分野とも関わりを持っている。残念ながら、拙論ではそれらのすべてに触れることはできないが、別の機会を見つけて再検討することにしたい。

今後さらに絵画や詩文などに現れた美人像を材料として考察する時、比較文化史の角度から「日本と中国の間に共通する美人観と相違する美人観もあった」という事柄がいつそう確実に見えてくるのであれば、筆者にとってこれほど嬉しいことはない。

日中美人イメージの比較には、まだまだ未解決の問題が山積みである。例えば恐れられた美女・美女薄命、美女の服飾・西洋美女との出会い・近代的美女像の創出などである。これらの問題を総合的に解決するには、資料の収集はもちろんであるが、より厳密な分析、そしてより広い視点からの研究が必要であると考えられる。